

あさお希望のシナリオプロジェクト STEP2 第1回検討会 (2021/5/23)

全体発表摘録

テーマ

「コーディネート・マッチング機能」の理想として「地域活動などについて相談できる地域のコーディネーターがいる」であるとしたとき、①「なぜ現在、コーディネーターがいないのだと思いますか?」、また、②「どうしたらコーディネーターを設置できると思いますか?」をお考えください

【1班】

- ・なぜコーディネーターがいないのかという問いについては、「既にいる」「この人に聞けばなんとかなりそうだなという方々がいる」という意見が出た。しかし、「知られていない」「そもそもコーディネーターのような人を知らない」「聞いてもいいということを知らない」「どこに聞いたらいいかかわからない」ので、「場」というものが大事で、つくらなければいけないという意見だった。
- ・コーディネーターも場も色々な分野にあっても、横のつながりが無い。たくさんいらっしゃる、分野ごと、各地区の方々のコーディネート機能も大事。
- ・コーディネーターはいても状況が曖昧で、その人がコーディネーターとして意識していないということがある。例えば正式に登録制とするなど、「この人はコーディネーターですという立場を与えてみてはどうか」という意見が解決策として出た。
- ・登録制としても、ずっとボランティアはどうなのかということで、正式に有償のコーディネーターという立場を与えて活動できる仕組みを最初から作ったらどうかという意見も出た。
- ・分野別のコーディネーターはそれぞれ得意分野があるので、分野ごとに割り当てたらどうか。
- ・場については、コーディネーターたちの横のつながりが無いと全体を網羅できないし、情報のアップデートも出来ないのだから、コーディネーターがつながる「場」を作った方がいいという意見が出た。具体的な場も良いが、プラットフォームを作って情報共有できる仕組みを作ったらどうかという意見があった。
- ・「知られていない」という点については、各種イベント等で「こういう場がある」「こういう情報がある」ということを、イベントを通して一般の方々に周知することができるのではないかと。
- ・箱づくりに関しては、具体的な場として「やまゆり」、市民館相談ルーム等あるので活用するのはもちろんであるが、問題提起されたこととして、「やまゆり」はスタート時には理想的な形として、みんながふらっと立ち寄ることができる場があったが、長年経ち、出来上がってしまった感じがあって、新しい人が利用しにくいという意見もあった。活性化や敷居を下げるということも念頭に入れた方がいいのではないかとという意見が出た。
- ・まとめると、コーディネーターは具体的には存在しないけれど、実際に、人材がいっぱいいますよ、と。けれど、なかなか知られていないし場所もないよということ。それについて、「場」を設けて、分野ごとのコーディネーターを募って、横のつながりをつないで、それを市民の方々にフィードバックしていくようなシステムが出来たらいいね、という話になった。

【2班】

- ・なぜコーディネーターがいないのかという問いについては、「団体がそもそも多すぎる」「次から次へと市民団体が出てくる」「活動内容まで把握が難しい」「情報の集約が難しい、見える化が難しい」という情報面の課題が出た。
- ・また、「そもそもコーディネーターの育成がされていない」「コーディネーターの認定制度がない」「そのような役割をする人がいても活動費が保障されていないので続かない、中途半端になってしまう」「大変だからやらない」「役割が不明」という人材面の話があった。
- ・「情報集約」の側面と、「人材」の側面があるということが前半のまとめ。
- ・解決策として、「情報集約」の面では、「どんな情報を集約すればいいのか」というところで、地域活動についてどんな内容が「見える化」されるとコーディネーションしやすいかというプロセスの話であったり、そうした情報を登録型のサイトで閲覧しやすい形で集約できるか、という情報集約のところと、そもそも情報集約しているところがあるし場もあるけれど、そういうところが区民に知られていないのではないかという情報の広報の課題が出た。
- ・「人材」面では、コーディネーターの役割自体を定義する必要があり、求められる知識など人材を育成していく必要があり、育成後に活躍できる場所があった方がいい。そこに行けば、その人もいるし情報もある場所があるとコーディネーションしやすい。その方が継続的に活動するうえで、予算（が必要）。有給スタッフにしないと持続は難しいのではないか。そういう人を区民から募集しようとか、有能な人を他の活動からスカウトしようという人材確保の話が出た。
- ・すでにある「やまゆり」や、地域包括支援センターで、コーディネートする要員を増やす等のいろいろなアイデアも出た。

【3班】

- ・なぜコーディネーターがいないのかという問いについては、皆さんベテランというか、麻生区マスターの方達なので、「いる」という意見が多く出た。「いるけど知られていない」「自分達で出来てしまっている」「役割がまとまっていない」「予算・ハード面の課題」の4つがあげられた。
- ・「知られていない」というのは、「コーディネーターを見つけること自体が活動だ」「コーディネーターを専門にできる人がいない」という意見があった。
- ・「自分達が出来てしまう」というのは、まさに特徴的だが、「既存の団体が強い」「自分がやりたいことは自分でコーディネートする」という意見で、麻生区のことをよく知っている人たちがここに集まっているのだと思った。
- ・「役割がまとまっていない」というのは、「全体がまとまっていない」とか、そもそもこのテーマ設定自体について色々と意見があったので、コーディネーターの役割について色々と意見が出た。
- ・「予算・ハード面の課題」としては、「どこに設置すればいいのか」「報酬はどのくらい払えばいいのか」という課題が出た。
- ・どうしたらコーディネーターを設置できるのかという解決策については、議題①の検討が盛り上がったためあまりまとまっていないが、コーディネーターと行政との関わりの中で、行政が出来ないことを明確にして、コーディネーターがどれほど参加できるか、そこを重点的にする。そう

するとコーディネーターの役割が見えてくる。

- ・あと、「コーディネーターを登録制・認可制にする」「講座を受け育成する」「コーディネーターをやると楽しい」などにより、解決できればという意見が出た。

【4班】

- ・なぜコーディネーターがないのかという問いについては、付箋の多さのとおり、多様な意見が出た。麻生区は個の活動、既に活動をしているグループが沢山あって、皆さんがそれぞれ良い活動をされている。ただ、全体支援する仕組みというか、どうマッチングしていくかという機能が正直ないと思っている。高齢者でも、ママさんの団体でも、色々なことをやっていて、皆さんが素晴らしい活躍をされているが、それをどうまとめていくかというところで、そもそも何でそれが起きないかということを考えたときに、行政側と民間側の行動様式や言葉の使い方が違っていたり、共感するものがなかったり、それぞれがよい活動をしているところに自信もあるし成果も出ているので、これに対してどう寄り添って共通のものを作っていくことが出来ないのか、というのが課題であり、できていない原因ではないか。
- ・民間であればボランティアという言葉であり、ボランティアであればどの人がやるのというバランスが出てきたり、ビジネスに繋がないと続かないよね、という話が出てきたり。そこは行政ではできないところだが、仕組みづくりは行政でないといけないとか。そんなところで、共通言語、責任、コスト等色々なところでコーディネーターが生まれにくい原因になっているのではという議論になった。
- ・課題解決するにあたって、どうしたらいいのかという点では、3つにカテゴライズした。まず、「麻生区プライド」という非常にいい言葉が出て、一人の方からシビックプライドという言葉をいただいて、相模原でやっている取組を紹介してもらったが、麻生区のプライドを持って拠り所となるところを一つ、例えばフロンターレも旗の元に集うというわけで、サポーターも選手もスタッフも集うということがあると思うので、麻生区もプライドを作っていく必要がある。そのプライドがあって、今まで個々の団体の取組は非常にいいものを行っているので、そこはもちろん尊重しつつ、それが土台となって新しいものを作っていくという、少し我慢が必要なんだと思う。
- ・これまでこんなことをしてきたということは誰もが言いたいし、自信もある。でもそれをぐっとこらえないと、それぞれの活動の発表会になってしまうと思うので、じゃあそこを堪えて「麻生区プライド」を作っていこうというところ。
- ・「コーディネーターの存在の明確化」というところで、コーディネーターとは具体的に何なのか。先ほど官・民の話をしたが、民間でやるとボランティアになってしまうところを、コーディネーターとするには認定を受けたり、麻生区と一緒にやったり、市役所と一緒にやったり、そういった存在を明確化するために色々なものを明確化していく。「コーディネーターとは何」「責任は何」「目的は何」というのをしっかりと行政と一緒に考えていかないと、SDCもコーディネーターも、置く意味がないと考えた。
- ・その中で出たのが、「データベースを作りたい」とか。得意な分野も色々あるし、共有できるデータベースがないと、そもそも何をマッチングするのということになるので、そういったものを作

るとか、コーディネーターはいっぱいいるので、「コーディネーターのコーディネーター」が必要なのではないかという意見も出た。

- ・「共感」というくくりでは、使っている言語が違って、共感するものが違ってしまおうとどうしても新しいものをつくっていく時に邪魔をしてしまう……。内閣の支持率を見ても、30%、40%とあって、100%いかないのと一緒に、やはり共感するものは多種多様で違うと思うが、やはり「麻生区はこうだよ」という共感の根っこをつくらないと、そこに寄り添っていけないのではないかなど。
- ・それは、行動様式だったり、言語だったり、目的意識だったりとか。ここは我慢してこの人にやってもらおうとか尊重しつつ、みんなで持ちつ持たれつやっていくのがSDCなのだろう。今までの麻生区の活動をまとめて新しいものをその土台の下に作っていけるのではということ、解決策としては「麻生区プライド」を先に持ってきて、「コーディネーターの存在の明確化」と「共感」をあげた。

【オンライン班】

- ・なぜコーディネーターがないのかという問いについては、他の班と同様に「いると思う」等様々な意見が出た。
- ・また、「人でないとダメなのか」という意見があり、コロナでなかなか人がつながるのは難しいからオンラインで成り立つ仕組みを考えた方がいいのではという意見が出た。
- ・色々意見が出た中で、大きく分けると「組織」「メリットがない」「人がいない」の3点が出た。
- ・1点目の「組織」としては、コーディネーターが安心して活動・活躍できるような組織づくり、公平感があって安心感がある組織が必要だという意見が出た。組織の中で人選をどうするのか、公平性・公正性をどのように保つのか、誰が保つのか、保つのが難しいからいないのではないのかという意見が出た。
- ・「メリットがない」という点では、お金にならない、ビジネスにならない。課題がある人・コーディネーター・解決する人の関係性がなく、なかなかwin-win-winの関係が築けない。
- ・また、小さなコーディネーターはいるけど、手の届く範囲でしか現状広げられていない。
- ・解決策については、「行政の介入」であったり、「お金を出せばいいのではないか」「対価があるといいのでは」という意見があった。あとは「面白さ」。こんなことが出来たら面白いよねと、いうことを色々な人に思ってもらえることで、ボランティアをしてくれる人が出てくる。これで、やれる人がいないという人材の問題について解決できるのではという意見も出ていた。
- ・コーディネーターの資格を与えることで、資格をスキルとして仕事にも使えたり、お仕事に活かすことが出来ることで、コーディネーター役の人にもメリットが出るのではという意見が出た。
- ・人材の育成という部分で、コーディネーターの育成講座や、一人ではできないのでチームでやるとか、地域の情報を収集するために外回り担当を作って、みんなで収集したものをチームで解決していく形がいいのではないかと意見があった。

(以上)